

共生社会に向けた障害者理解教育の在り方 —社会的距離・接触体験・評価尺度の関係から—

鳴海正也

九州女子大学人間発達学部人間発達学人間発達学専攻 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2022年10月6日受付、2022年12月1日受理)

要旨

本研究では、共生社会に向けたインクルーシブ教育の構築を可能とする障害者理解と何かを明らかにするための調査を行った。特殊教育から特別支援教育への転換もあり、社会の障害者への理解は大きく変容した。障害者理解は、就学前に身近な障害者との気づきに始まり、小中学校での学びを経て、大学での理解につながり形成される可能性が示唆された。障害者理解と社会的距離の関係性を明らかにすることでより汎用性の高い尺度を作成できるのではないかと思われる。障害者理解の在り方を明らかにするためにはより広範囲な対象者のデータを収集する必要性が明らかとなった。

キーワード：障害者への気づき、社会的距離、尺度の妥当性

I 問題と目的

日本においては、1979年に障害児の養護学校への入学の義務化がなされ、すべての障害児が養護学校に通うようになった。1980年代は障害児の養護学校へ就学が定着していった時代であり、通常の学校においては、学校教育法（昭和22年法律第26号）の第81条によって、設置が可能となった特殊学級において障害のあるものに対する教育が行われた時代である。この間、障害者はその障害種別によって分断された教育を受け、その環境の中で障害者理解という概念は特殊教育の中で培われてきた。と考える研究者が多い。一方、教育現場では、実践面から障害者に対する教育研究が充実した時代とも言える。

障害者理解を尺度化しようという取り組みは、徳田克己（1990）の障害者に対する理解を量的に分析しようとしたのがスタート地点であったと言える。これらの動きに応じて障害者雇用関係の法律をはじめとした法律や制度が整備され、さらにボランティア活動の充実などもあって、従来に比べて障害者を取り巻く社会的環境はかなり改善されていった。障害者を取り巻く環境は改善に向かってはいたが、十分に日本の社会が、障害者のことを社会の一員として理解し、受容する共生社会は実現には程遠い状況であった。徳田克己（1990）は、時代の制約や障害種別という限定性はあるにしろ、障害者理解という分野の先駆けとしての論文として重要なものである。

国際的には、障害をもつ人びとの機会均等化に関する基準原則（Standard Rules on the Equalization of Opportunities for Persons with Disabilities）（1993）の思想がサラマンカ声明（1994）をもって整理される。サラマンカ声明は単に障害者をだけを扱っているわけではなく、インクルージョン（inclusion）の原則、「万人のための学校」という概念を含み、個人主義を尊重し、学習を支援し、個別のニーズに対応する施設の設置に向けた活動の必要性の認識を前文の中で述べている。その中では「特別なニーズがある人々に限定される」のではなく、さらに広い意味での表現が使われている。このことはその後の障害者理解や教育に大きな影響を与えた。

2001年にはWHOが「国際生活機能分類」（国際障害分類改訂版、International Classification of Functioning, Disability and Health : ICF）を提案した。障害者も学校、家庭、地域で生活している人として、今までの心身機能や身体構造中心に個人因子に重点をおく障害理解ではなく、活動や参加レベルに注目し、環境要因を含めて障害を理解する障害観へと大きく変化を遂げていく。眞城知己（2002）で「理解する対象は、障害や障害者のことではなく、障害や障害者について考える過程を通した私たちの生活や社会のこと」と述べ、社会的な視点からの理解が重要であることを強調している。このことは、障害者を個人因子の面からとらえるのではなく、環境因子から見直すことの重要性を述べていると考えられる。この点

からも、障害者理解が障害のある人との接触体験が発達のどの段階で起こったのか。さらに、その接触体験がどのように社会との社会的距離感に影響を与えたのかに着目していくことが重要なことを示唆している。

特殊教育が変わって特別支援教育が広がることによって障害者観も大きな影響を受けたと考えられる。この変化は単なる名称変更ではなく、その理念を含めて根幹にかかわる変更であった。対象者は、従前は「その他心身に故障のある者で、特殊学級において教育を行うことが適当なもの」とされていたものが、「その他教育上特別の支援を必要とする児童・生徒及び幼児」に修正された。この一文に表現されるように障害者理解は、公的には「故障のある者」ではなく「支援を必要とする者」へと変化していった。また、支援の対象者の枠が広がり、「特別支援教育は、これまでの特殊教育の対象の障害だけでなく、知的な遅れのない発達障害も含めて、特別な支援を必要とする幼児児童生徒が在籍する全ての学校において実施されるものである」と述べられており、このことも障害者理解に大きな影響を与えたと考えられる。

障害者理解に尺度法を利用した研究では、柳沢亜希子（2006）は「学生が有している障害に関する知識や障害に対する具体的な理解の内容にまで踏み込んで、検討されていない。」と述べているように接触経験と障害理解教育の受講経験（知識の獲得）との関連を検討する目的とする論文を作成している。障害者に対する態度の変容の要因として、多くの知見で接触体験があげられる。この場合の接触体験とは、障害のある身内、個人的な関わり、障害のある当事者との交流等があげられるが近年、障害者と触れ合う経験は社会の変容とともに早期化多様化していると考えられる。この状況が障害者理解に大きな影響を与えていると考えられる。この接触体験の時期や内容を評価することは、障害者理解または障害者理解教育を評価するうえで重要になってきている。

また、多様なニーズへの対応は、新たな対象者の広がりを生み出すと同時に多くの変化を生みだし、障害者理解も変化していった。芝田裕一（2010）は、「障害や障害児・者が適正に社会に理解されるための障害理解教育や社会・個人に対する啓発は各地で行われている。中でも障害児理解教育は、まだ、十分とは言えないところがあるものの、近年、着実な広がりを見せてきていると思われる。」と述べ、連携というキーワードの重要性を示唆している。連携というキーワードを考えると、障害者と他者の社会的な距離を考慮する社会的距離の評価がさらに重要になってきていると考えられる。

徳田（1990）と同じく量的な分析から障害者理解を評価しようとしたものとしては楠敬太ら（2012）があげられる。この研究は徳田の尺度を活用し、児童生徒版の多次元態度尺度を開発しようとするものであり、課題として標準化したアンケートを取り比較検証することが重要だとして、多次元的態度尺度の研究を行い、その結果から5因子16項目からなる領域を抽出している。

近年、法制度の整備や社会啓発を通じて、物理的な社会障壁を取り除く流れが顕著である。特に、目に見えやすい障害に対してバリアフリーな生活環境を提供しようとする動きは年々充実している。一方で、障害者に対する心理的な障壁についての改善が進んでいないという指摘がある。特に、発達障害に代表される「見えにくい障害」が広く知られるところとなり障害者理解という表現も不明確になりつつある。むしろ「障がいがある人」という表現が使われることが多くなってきていると思われる。この変化の中で障害のある人に対する理解がどのような変化があるのかを明らかにした検証は少ない。

共生社会を実現するには、障害者の周りにいる人々の理解が不可欠である。これまで、児童生徒の障害理解教育を評価しようとする研究は少数ではあるが存在する。しかし、単純な量的分析や統計だけでは、複雑な構造を持つ「障害者理解」に切り込むのは難しいと考えた。そこで、本研究では、特別支援教育を体験してきた大学生の障害者理解に関して新しく構成した尺度及び自由記述式の回答への量的テキスト分析を活用することで、現代に適応した評価の可能性についての検討を行うことを目的とした。

II 方法

① 調査対象

教育福祉系大学で学ぶ学生（55名を対象とし54名の回答を得た。有効回答率 98.2%）

② 調査方法

2021年9月に調査を実施した。

③ 調査内容

鳴海正也（2021）の障害者理解尺度 Ver2.0（表1）及び自由記述法を用い、調査を行った。

④ 統計処理

量的分析は、HAD16を使って分析処理した。一部作図には Excel（Microsoft）を使用し作図した。質的な計量テキスト分析には、KH-coder 3 を使って分析を行い作図にも活用した。

III 結果

① 調査の全体像

教育福祉系大学生に実施した障害者理解尺度 Ver2.0 の平均値と標準偏差が表1である。

表1 障害者理解尺度 Ver2.0 の平均値と標準偏差

	項目	M	SD
30	障がいのある人と、友人になりたい。	3.355	0.794
5	障がいのある人と一緒に遊びたい。	3.225	0.884
18	障がいのある人と一緒にクラブ、部活に入りたい。	3.149	0.823
9	障がいのある人と班活動をしたい。	3.099	0.800
13	障がいのある人と同じクラスになりたい。	3.099	0.723
12	障がいのある人に家族の一員になって欲しくない。	2.942	1.286
1	障がいのある人と席が近くなったら良いのと思う。	2.817	0.830
19	障がいのある人も自分と同じ世界に生きている。	4.475	0.820
22	障がいのある人は、すべての面で劣っているわけではない。	4.380	0.915
11	障がいのある人は、自分の境遇に甘えているわけではない。	4.281	0.878
17	障がいのある人が困っているとき、迷わず支援できる。	3.860	0.859
21	障がいのある人ともコミュニケーションをとれる。	4.008	0.861
15	障がいのある人は、すぐれた芸術的才能を持っていることがある。	3.909	0.913
10	障がいのある人は普通学校に入ることによって多くの経験をすることができる。	3.810	0.830
31	障がいのある人を普通学校に入れると、お互いの理解が深まる。	3.711	0.821
26	障がいのある人を福祉にまかせるだけではない。	3.702	0.843
29	障がいのある人は、いろいろなことに希望を持っている。	3.653	0.863
33	障がいのある人に対して関心がある。	3.595	0.748
7	障がいのある人は、手伝ってもらうことを当り前とは思っていない。	3.562	1.007
16	障がいのある人は、他人に対して親切である。	3.521	0.867
4	障がいのある人にも気軽に声をかけられる。	3.488	1.065
24	障がいのある人も、ない人も記憶力はあまり変わらない。	3.471	1.088
20	障がいのある人は、施設で生活するよりも一般社会の中で生活するほうが良い。	3.430	0.825
25	障がいのある人は、援助がなくても多くのことができる。	3.331	0.934
27	障がいのある人に適した授業は、普通の学校でも十分にできる。	3.322	0.858
14	障がいのある人も、普通学校の中で十分に活動することができる。	3.227	0.952
2	障がいのある人も普通学校で教育するのが一番良い。	3.182	0.922
23	障がいのある子どもは、特別な支援を受けるよりも普通学校のほうが力を伸ばすことができる。	3.124	0.812
32	障がいのある人は、相手の気持ちを理解する特別な能力を持っているわけではない。	3.083	1.092
28	障がいのある人は、情報の習得が片寄っていることがある。	3.033	0.966
6	障がいのある人は、普通学校で十分に教育することができる。	2.925	1.014
3	障がいのある人は、社会でうまくやっけていきにくいことがある。	2.867	1.243
8	障がいのある人は、ためらいなくものを尋ねることができる。	2.620	1.027

各項目は5件法で評価され、全体平均3.432 標準偏差の平均0.914であった。平均値及び標準偏差は、2年前に行った事前調査（鳴海正也（2021））と比べ、平均値がいくらか低く、標準偏差が大きな値を示す傾向がほぼ同様であると言える結果であった。

平均値が高いものから、⑲障がいのある人も自分と同じ世界に生きている。（4.475）⑳障がいのある人は、

すべての面で劣っているわけではない。(4.380) ⑪障がいのある人は、自分の境遇に甘えているわけではない。(4.281) ⑫障がいのある人もコミュニケーションをとれる。(4.008) ⑮障がいのある人は、すぐれた芸術的才能を持っていることがある。(3.909) という結果だった。平均値の高い項目は5項目中4項目が同じ項目であり同じ傾向であった。

一方、平均値が低いものは、⑧障がいのある人は、ためらいなくものを尋ねることができる。(2.620) ①障がいのある人と席が近くなったら良いのと思う。(2.817) ③障がいのある人は、社会でうまくやっ
ていきにくいことがある。(2.867) ⑥障がいのある人は、普通学校で十分に教育することができる。(2.925) ⑫障がいのある人に家族の一員になって欲しくない (2.942) という結果であった。(図1参照) 障害者理解尺度 Ver.2.0 から取り入れた①障がいのある人と席が近くなったら良いのと思う。⑫障がいのある人に家族の一員になって欲しくない。の2項目は、肥田乃梨子ら (2018) の青年版社会的距離の近さ尺度を活用したものであり他の項目と違う傾向をしめしました。(図1参照)

標準偏差の値が大きなもの (SD が1.00以上) のもの8項目を挙げたのが図2である。標準偏差が高いということは、その項目に対してばらつきが大きいということであり、障害者理解の項目として検討するに値する結果となった。(図2参照)

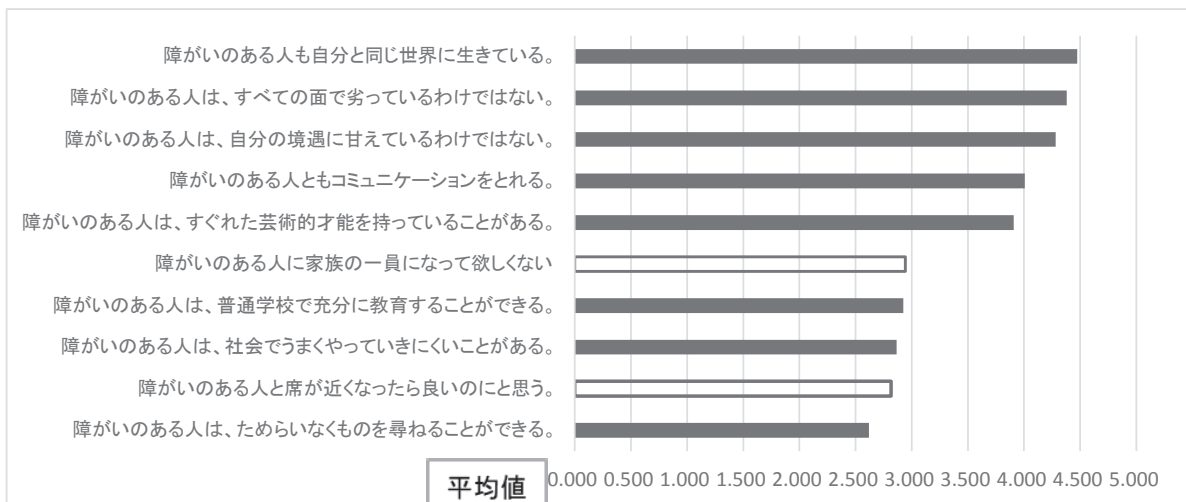


図1 各項目の平均値 (最高値・最低値共に5項目 検討を有するものは白抜き)

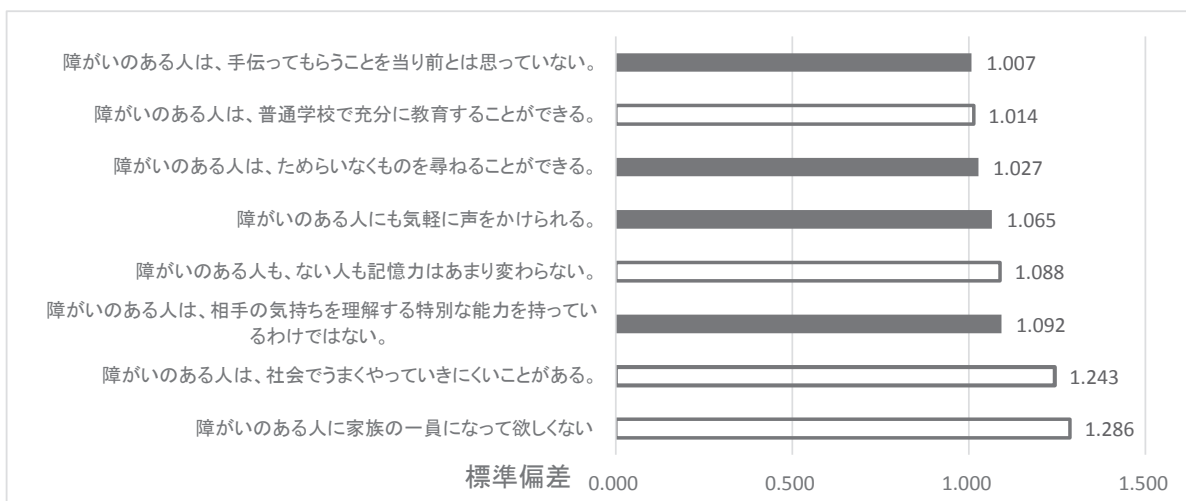


図2 各項目の標準偏差 (SD が1.00以上の8項目)

② 追加した青年版社会的距離の近さ尺度

肥田乃梨子、石川信一（2018）を参考として、今回の尺度に追加した項目についての平均と標準偏差は以下表2のようなものであった。否定的な表現に関しては逆転項目として集計を行った。その結果、⑫「障がいのある人に家族の一員になって欲しくない。」は他の項目とは少し違う傾向が見られた。①の「障がいのある人と席が近くなったら良いのと思う。」は、平均値が低く文末表現が違うことから今回のような結果となった。

表2 社会的距離の近さ尺度の結果

項目	M	SD
30 障がいのある人と、友人になりたい。	3.355	0.794
5 障がいのある人と一緒に遊びたい。	3.225	0.884
18 障がいのある人と一緒にクラブ、部活に入りたい。	3.149	0.823
9 障がいのある人と班活動をしたい。	3.099	0.800
13 障がいのある人と同じクラスになりたい。	3.099	0.723
12 障がいのある人に家族の一員になって欲しくない。	2.942	1.286
1 障がいのある人と席が近くなったら良いのと思う。	2.817	0.830

③ 障害者への初めての接触体験（気づき）についての自由記述の計量テキスト分析

対象者には「障がいのある方の存在に初めて気づいたのはいつ頃ですか？どこでどのような機会に知りましたか？」という質問に自由記述形式で答えてもらった。

【就学前＝保育園 OR 幼稚園 OR 物心ついた】というコーディングルールを設定して分析を行った。

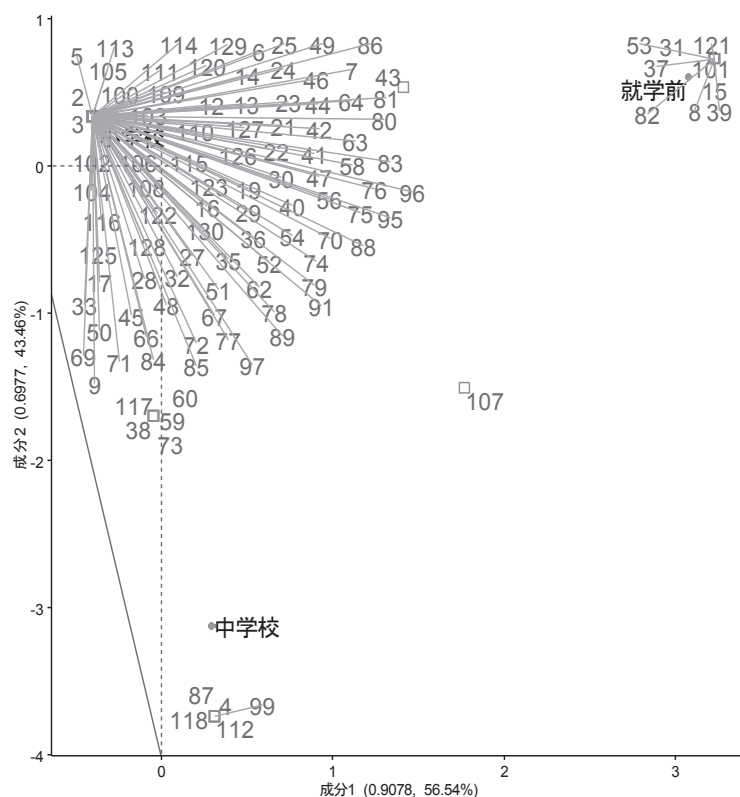


図3 障害者との初めての接触体験（対応分析の結果）

抽出語分析として時期の記述としては、小学校が91件 保育園・幼稚園が22件 中学校が11件となった。結果として障害者への初めての気づきは就学前・小学校・中学校と大きく大別されるが高校以後には気づきとして現れないことが明白となり、中学校以前に障害者に初めて気づきことが分かった。また、障害者への初めての気づきの大半は小学校の時に始まるのがこの分散図から読み取れる。また気づきのきっかけとしては、特別支援学級が57件 授業・教室・学校が27件 テレビが9件 交流が5件となっており、学校での気づきが大変を占めている。また、特別支援教育の重点として進められている交流及び共同学習が障害者の存在を気づききっかけとあまりになっていない結果となった。

図3がKH Codeで作成した対応分析（コレスポネンス分析）である。小学校での出会いが大多数を占めることが分かり、就学前は、家族・親戚や身近な人の障害に気づくことが目立っている。小学生では学

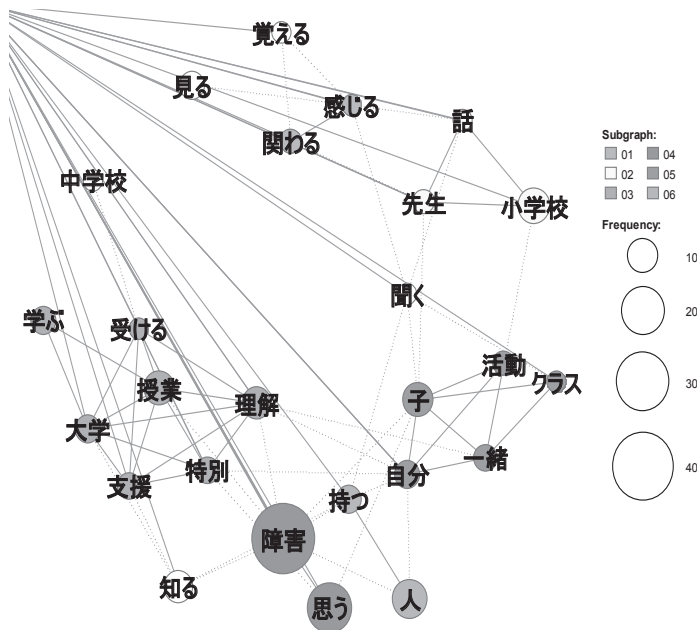


図6 障害者理解へ影響を与えた要因（共起ネットワーク図）

が障害者理解に強い影響を与えていることが読み取れる。

そのような構造から少し離れたところに、障害のある人と「一緒に活動する」という成分が位置づいて、大学生の障害者理解を形作る元となっていることが結果として分析された。

障害者理解へ強い影響を与えた要因に関しての共起ネットワークも相関分析も同じ傾向を示している。小学校では、先生の話を聞き、感じ、覚えることによって障害者理解を体験し、大学の授業を受ける中で特別支援に関して学ぶことが障害者理解を深めることに繋がっている事が読み取れる分析結果となっている。そして、もう一つ大切な観点として、障害を持つ人に対して何らかの思いを持つことが障害者理解にとって重要な要因であることを示す結果となった。

IV 考察

本研究では、障害者理解尺度 Ver2.0 に関しては、実験的に肥田乃梨子ら（2018）「青年版社会的距離の近さ尺度」を障害者理解に適するように文章表現を変更したものを障害者理解尺度 Ver1.0 に加味して調査を行った。この新しい尺度では、旧来の尺度の平均値および標準偏差とはほぼ同じ傾向を示した。この2つの尺度は、障害者のことを他者がどう理解しているのかという障害者に対する他者理解の部分と、理解したうえで障害者とのどのような社会的距離を望むのかという少し質の違う尺度ではないかということが、今回の調査から見えてきた。

①「障がいのある人と席が近くなったら良いのと思う。」と②「障がいのある人に家族の一員になって欲しくない」の2項目は平均値が低く、更に標準偏差も大きな値を示す。①は社会的距離の尺度の中でも願望型の特徴的な文末を持っており独特の位置づけである。②は本来選択することが困難である他の要因（生まれた時から家族に障害者がいるケースが今回たくさん見られた）が多く含まれるために慎重に扱われるべき項目だと考えられる。確かに、「青年版社会的距離の近さ尺度」は、障害者の理解に大きな示唆を与えるものである。けれど、この尺度が青年期の社会的距離に特化したものであることを考え合わせるなら、2つの尺度は本来別々に運用されるべきものではないかと調査結果からは類推された。

調査項目全般を見ると、全体平均3.432 標準偏差0.941と肯定的な方向に中央値がある。このことは、前回の調査データとよく似た傾向を示し教育系大学で学ぶ学生では、障害者の理解に関して肯定的な反応が現れる傾向が強いことが分かった。平均値の低い項目のうち、上記の2項目を抜いた3項目を検討してみると、⑧「障がいのある人は、ためらいなくものを尋ねることができる」③「障がいのある人は、社会でうまくやっていきにくいことがある」⑥「障がいのある人は、普通学校で十分に教育することができる」の3項目は、どれも標準偏差が大きく、意見が分散しやすい傾向がみられる。項目ごとに詳しく見ると、⑧の内容は障害の種別・程度によって違う傾向を示すものであり、特別支援教育が一般的になってからの傾向である障害の多様化に対する理解が深まれば、多様な反応が想定されるものである。このような意味から項目としての妥当性であると考えた。同じく平均値は低い③と⑥の項目に関してみると、③に関しては、障害者の

社会的自立や社会的障壁を取り除いていくことが重要である今日の社会的状況を考え合わせると妥当な項目であると考えられる。⑥はまさに共生社会を作り上げていくうえで、避けては通れないインクルーシブ教育の構築の進行状況や賛否を反映するものになっていると考えられる。この③と⑥の項目は平均値が低くとも「共生社会を目指す時代の障害者理解の項目」として尺度に残していくことが妥当ではないことが考える。

障害者理解の尺度としては、理解することを中心に作成することは重要である。一方、理解の深まりが社会的な態度や距離に反映されることは、共生社会を形成していくうえで重要である。理解と社会的な距離の間にはおそらく、正の相関が成立することが予見される。この意味からも、社会的な距離を評価する肥田乃梨子ほか(2018)の研究は重要な方向性を示している。「障がいのある人と、友人になりたい。」「障がいのある人と一緒に遊びたい。」「障がいのある人と一緒にクラブ、部活に入りたい。」「障がいのある人と同じクラスになりたい。」「障がいのある人と班活動をしたい。」の項目には、一定の順序性が存在する可能性があり、そのことは、障害のある人との社会的な距離を正確に反映している可能性もある。今後、障害者理解と社会的距離の相関性などを検討することがより良い障害者理解教育に重要な示唆を与えられると思われる。これらのことを明らかにするために、今後データ数を増やし、詳しく調査していくことが望まれる。

障害者理解で重要な障害者への気づきについて、定量的テキスト分析からみると就学前・小学校・中学校3つの時期に現れることがコレスポネン分析の結果から明らかとなった。初めての気づきであるので高校や大学がみられないのは妥当なところであろう。それぞれの時期で性格が違うことも自由記述や共起ネットワーク図から明らかとなった。

就学前での障害者との出会いは、「身近な家族や知人」、「兄弟に障害のある」といったケースが大半を占めた。早期に身の回りの障害者に気づき、かかわりを持つことはとても障害者理解にとって有益な事である。典型的な例として「自分の家族にいた。自分は三男なので、物心ついた時から知っていた。」「私は小さいころから身内に障がいがある人がいたので物心ついた頃から存在を知っていた。」などの記述が多く見られた。早期からの障害者理解教育の重要性を述べる論文を見ることが多いが、早期の気づきがかえって、嫌悪感につながる「私の兄がADHDを含む複数の脳の障害(先天性)で、祖母は白内障をわずらい体もかなり弱っている状態しか知らない。私は、心と体両方の障害と向き合ってきた。結果として兄の方は障害があることを踏まえて、一生かかわりたくない生まれてこないでほしかったと思っている。」と言うような否定的な事例も読みとれた。統合保育やインクルーシブ保育の推進が主張されるが、早期の障害者教育のあり方について効果と影響を正しく評価し、障害者理解教育が進められるべきだと考える。

小学校では、4つの違う観点から障害のある人と初めて出会うことがコレスポネン分析から分る。1つ目は、障害のある子どもをクラスメイトに持つことによって生まれる出会いである。2つ目は教室で授業を受けることによって教師が主体となる出会いであり、3つ目は、特別支援学級やそれに属する同級生を知ることによっての障害者との出会いである。4つ目として、少し質の違う「交流及び共同学習」の取り組みであり、この要素も大切な要因として位置づいていることも読み取れる結果となった。一方、中学校で初めて障害者に気づく子どもたちは、学校と言う枠ではなく、テレビや地域社会の中で障害者を意識することになることがあきらかとなった。

障害者理解の形成に大きな影響を与えた出来事は、コレスポネン分析によれば4つの方向に散見しているように思われる。そして、障害者理解に対してのインパクトのある体験は、就学前にはあまりがなかったように読み取れる。このことも早期の障害者理解教育の限界性を示しているのかもしれない。第1成分としては、大学で特別支援に関する授業を学ぶことによって理解し学んだことがあげられる。第2成分として小学校では、教師から聞いたこと、見たり、感じたりしたことが強く影響していることが読み取れる。結果的には、この大学での授業と小学校での体験の2つの成分と大きく関わりながら、障害のある人に対する思いをもち、障害者への思いをもつに至ったと考えられる分析結果となった。コレスポネン分析では、障害のある人と一緒に活動することも要素のように思われるが、共起ネットワーク図の分析からは、そのことは読み取ることができなかった。障害のある人と一緒に活動することは非常に大切な体験ではあるが、強い印象を与えると言う要素はあまり強くないのかもしれない。さらに、この調査を行った対象が教育福祉系大学であったために大学での授業が強く影響した可能性があり、他の対象と比較する必要がある。また、

誰もが大学で障害者に関する授業を受けるわけではないことを考え合わせると、今後、他の対象との比較を行いより良い障害者理解教育の在り方を論議することが必要になると考える。

V 成果と課題

障害者理解は、就学前に身近な障害者の方に接することに始まり、小中学校での学びを経て、大学での理解につながる長い時間の中で形成されることが明らかとなった。

障害者理解の尺度作成に関しては、より広範囲な対象者を調査し、データ数を増やすことを通じてさらなる妥当性を検証していくことが重要である。また、障害者理解と社会的距離の関係を明らかにすることでより汎用性の高い尺度を作成できるのではないと思われる。一方で、障害者の多様化に対応した障害の種類を限定した尺度の作成や有効性の検討が必要である。

参考文献

- ・徳田克己 (1990) : 視覚障害児・者に対する一般の人の態度を改善するための技法とその評価. 視覚障害心理・教育研究, 7 (1・2), 5-22.
- ・徳田克己 (1991) : 障害児・者に対する態度を測定するための多次元的态度尺度の開発 (2) 桐花教育研究所紀要
- ・「障害をもつ人びとの機会均等化に関する基準原則 (Standard Rules on the Equalization of Opportunities for Persons with Disabilities)」(1993) : 国際連合
- ・Salamanca Statement on Principles, Policy and Practice in Special Needs Education and a Framework for Action (1994) : United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization
- ・長崎勤, 前川久男・石井昭男編 (2008) : ICF に基づく障害の理解 シリーズ障害科学の展開, 第5巻 明石書房
- ・文部科学省初等中等教育局長 (2007) : 特別支援教育の推進について (通知), 2007年4月1日
- ・芝田裕一 (2010) : 障害理解教育及び社会啓発のための障害に関する考察. 兵庫教育大学研究紀要37巻, PP.25-34.
- ・内閣府 (2011) : 障害者基本法 (最終改正 : 平成二十五年六月二十六日法律第六十五号)
- ・芝田裕一 (2013) : 人間理解を基本とする障害者理解教育のあり方. 兵庫教育大学研究紀要, 第43巻, p25-36.
- ・中村義行 (2011) : 障害理解の視点—「知見」と「かかわり」から. 佛教大学教育学部学会紀要, 10号, p1-10.
- ・真城知己 (2002) 教員養成課程における「障害理解教育」実践者養成に関する研究 : 意識変化の特徴検討へのコンジョイント分析の応用. 発達障害研究 23 (4), 267-275, 日本発達障害学会
- ・楠敬太, 金森雄二, 今枝文雄 (2013) : 障害者理解教育の評価に関する研究. 大阪教育大学研究紀要, 第61巻 第一号, p59-66.
- ・徳田克己 (2005) : 障害理解の測定. 障害理解 心のバリアフリー理論と実践, 誠信書房, 57-69.
- ・小林倫代 (2008) : 障害乳幼児を養育している保護者を理解するための視点, 国立特別支援教育総合研究所研究紀要 第35巻, 75-86.
- ・吉井秀樹, 吉松靖文 (2003) : 年長自閉性障害児の自己理解, 他者理解, 感情理解の関連性に関する研究, 特殊教育学研究, 41巻 (2003) 2号
- ・和泉綾子, 田口禎子, 三浦巧也, 堂山亜希, 林安紀子 (2013) : 教師志望大学生の障害者理解と障害理解教育に関する調査, 東京学芸大学紀要. 総合教育科学系, 64 (2) : 235-243.
- ・柳沢亜希子 (2006) : 保育者をめざす学生の障害に対する理解 : 障害のある人々との接触経験および障害理解教育との関連について, 北陸学院短期大学研究紀要, 第38号
- ・肥田乃梨子, 石川信一 (2018) : 青年版社会的距離の近さ尺度の作成, Doshisha Clinical Psychology : Therapy and Research, Vol.8, No.1, Pp.3-17.

- ・ Bogardus, E. S. (1925). The boy in Los Angeles. Los Angeles : The Ralston Press.
- ・ 中根允文・吉岡久美子・中根秀之 (2010). 精神障害者に対するスティグマと社会的距離—個人的スティグマと知覚的スティグマの相違—. 日本社会精神医学会雑誌 17 177-187.
心のバリアフリーを目指して—日本人にとってのうつ病, 統合失調症— 勁草書房
- ・ 大島巖 (1992). 精神障害者に対する一般住民の態度と社会的距離尺度—尺度の妥当性を中心に— 精神保健研究, 38, 25-37.
- ・ 鳴海正也 (2021) : 共生社会に向けた障害者理解の評価に関する基礎研究 I. びわこ学院大学・短期大学部 地域連携研究センター年報 2020年第7号びわこ学院大学

Understanding Education for Persons with Disabilities for an Inclusive Society

Masaya NARUMI

Department of Education and Psychology, Faculty of Humanities, Kyushu Women's University
1-1 jiyugaoka, Yahatanisi-ku, kitakyushu-shi 807-8586, Japan

Abstract

In this study, we conducted a survey to clarify the understanding of people with disabilities that makes it possible to build inclusive education toward an inclusive society. There has also been a shift from special education to special needs education, and society's understanding of people with disabilities has changed greatly. It was suggested that understanding of people with disabilities may begin with awareness of people with disabilities close to them before entering school, and may lead to understanding at university through learning at elementary and junior high schools. By clarifying the relationship between understanding people with disabilities and social distancing, it seems that a more versatile scale can be created. In order to clarify the way people with disabilities should be understood, it became clear that it was necessary to collect data on a wider range of subjects.